

contents

全性連・第41回全国性教育研究大会報告…………… 1	今月のブックガイド…………… 8
北丸雄二のニューヨークレポート⑥…………… 6	JASEインフォメーション…………… 9
「ありのままのわたしを生きる」ために⑥…………… 7	

## ■全性連・第41回全国性教育研究大会報告

# 「生きる力」を育む性教育を目指して ～学校における実践を効果的に進めるために～



第41回全国性教育研究大会が、8月18日(木)～19日(金)の2日間、全国から200名余の参加者のもと、北海道札幌市のホテルライフオート札幌で開催された。

本大会は、全国性教育研究団体連絡協議会・北海道性教育研究会の主催、財団法人日本性教育協会の協賛のもと、内閣府・文部科学省・厚生労働省・全国国公立幼稚園長会・全国連合小学校長会・全日本中学校長会・全国高等学校長協会・全国特別支援学校長会・社団法人日本PTA全国協議会・社団法人全国高等学校PTA連合会・財団法人日本学校保健会・社団法人日本家族計画協会・社団法人日本産婦人科医会・社団

法人日本看護協会・北海道・札幌市・北海道教育委員会・札幌市教育委員会・北海道医師会・札幌市医師会・北海道学校保健会・札幌市学校保健会・札幌市看護協会の後援を受けたものである。

### ◆教育をめぐる

大会冒頭、石川哲也全国性教育研究団体連絡協議会理事長は、開催挨拶で次のように性教育の現状を語った。



石川哲也  
(全国性教育研究団体連絡協議会理事長)

文部科学省は、平成11年「学校における性教育の考え方・進め方」という指導資料を発行しました。これの作成には、多くの当会関係者が協力者として関わりました。私たちは、この考え方に即して性教育を展開してまいりまし

た。しかし、近年「性に関する指導」とか「性に関する教育」とか、さまざまな用語を、文部科学省は使用しています。かつて（昭和47年）、文部省（現文部科学省）は、局裁定による通知を発出し、「しかしながら、純潔教育と性教育とは、本来、その意義、理念つまり、目的および内容が異なるものではないと考えられます。」とし、学校において性教育という用語を使用し始めました。私たちは、もう一度用語の定義を明確にする必要があると考えています。

本大会の実行委員長である本間良夫北海道性教育研究会会長（札幌市立柏中学校長）は、同じく、開催挨拶で次のように訴えた。



本間良夫  
（北海道性教育研究会会長）

変化の激しい社会は、性意識や価値観の多様化、性の逸脱行為、性感染症、10代の人工妊娠

中絶などの性にかかわる深刻な問題を引き起こすことに加え、発達する情報メディアを悪用した性犯罪を生み出すなど憂慮する実態にあります。

性教育が、「生命の大切さを理解するとともに人間尊重、男女平等の精神に基づく正しい異性観をもって望ましい行動ができる児童を育成する」ことを目指す教育であることはご承知のとおりであります。したがって、各学校においては、性教育の視点から、各領域での性にかかわる指導内容の関連を整理するなどして教育課程に位置付け、実践することが望まれます。

主催者挨拶は、性教育の重要性と現状に対する強い危機感が込められたものであった。

来賓として、高橋教一北海道教育委員会教育長、北原敬文札幌市教育委員会教育長らが挨拶された。

以下、本大会のプログラムと内容の一部要旨を紹介する。1日目の18日は、森良一文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課教科調査官の「基調講演」と南砂読売新聞東京本社編集委員の「記念講演」が行われた。2日目の19日は、分科会および課題別講義、実践発表が行われた。

## ◆第1日 8月18日（木曜日）

### ◆基調講演

「学校における性に関する指導についてー学習指導要領に基づいてー」

森良一文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課教科調査官は、本年度（平成23年）から小学校で全面実施、中学校では、平成24年度から全面実施され、高等学校では、平成25年から年次進行される新しい学習指導要領における性に関する指導の位置付けについて、中央教育審議会答申および学習指導要領に基づいて解説した。



森 良一（文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課教科調査官）

新しい学習指導要領における性に関する指導内容は、平成20年1月に示された中央教育審議会答申に基づくことを紹介し、その具体的内容を紹介した。

その骨子は、以下のようなものであった。

性に関する指導にかかわることが、食育や安全教育などとともに「社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項」に取り上げられ、指導の方向性が示された。また、指導する際に学校全体で共通理解を図る、発達の段階を踏まえる、家庭・地域との連携を推進し保護者や地域の理解を得ること、集団指導と個別指導の連携を密にして効果的に行うことの重要性について示された。

また、個別に学習指導要領に基づいて、どのような教科・領域で、どのような場面で、性に関する指導（性教育）をなすべきか、詳細な解説があった。

### ◆記念講演

「求められる健康教育の視点」

講師の南砂読売新聞東京本社編集委員は、特異な



記念講演「求められる健康教育の視点」

経歴をもつジャーナリストである。日本医科大学医学部卒業、ベルギー留学、帰国後日本医科大学助手（専攻精神医学）を経て昭和60年読売新聞社に入社した経歴をもつ。医療、年金、福祉問題をテーマに報道、解説に従事しておられる。

南 砂  
(読売新聞東京本社編集委員)

医師の経験とジャーナリストの両者の視点から、青少年が、今、どのような状況の中に置かれているか分析し、健康教育の重要性について講演された。

南氏は、日本人は教育レベルが高く、病気と健康にもきわめて関心が高い。しかし、健康についての基本的認識に問題があり、肝心なことを知らなかったり過大な宣伝などに容易に流される傾向にある。医学の知識や健康のあり方は時代とともに変わるので、最新の知識を自ら学ぶことは必要だが、基本的な健康教育は、義務教育の中に位置付けるべきであると述べ、同時に健全な健康教育、性教育で、社会全体が青少年を育てることが重要であると語られた。その中で特に重要なことは、発達段階に応じた教育であると強調された。

子どもを大事にするということの意味、子どもが何をしてほしいかを考える子育ての視点が重要で、「生まれてきてよかったと思う子どもたちを育てることが大切である。いうまでもなく、学校だけでできることには限界があり、家庭・地域を含めて、社会全体が育むという共通の視点に立たない限り、これは実現できない」と締めくくられた。

## ◆第2日 8月19日（金曜日）

大会2日目は、午前9時30分から分科会、午後1時30分から課題別講義、午後3時20分から実践発表が行われた。

### 発達段階に沿った性教育への取り組み

午前のプログラムの分科会は、5つの分科会、10テーマの発表が行われた。

#### 第1分科会

##### 「小学校低学年における性教育の実践」

①3年生を対象にした「いのちの学習」で、テーマは、「自己肯定感を高め 人間関係力を育む性教育の実践～体験・実感を重視した単元構成、TT・GTを活用した性教育の授業～」。

発表者は山崎稔英（札幌市立宮の森小学校教諭）。

②2年生の生活科「あしたへのジャンプ」の単元で、テーマは「“命”のつながりを実感する授業づくり」。

発表者は、山吹はるえ（札幌市立北の沢小学校養護教諭）・岩出彩（札幌市立北の沢小学校教諭）。

いずれも級担任と養護教諭とで行った授業である。

助言者 大牧真一（札幌市教育委員会指導主事）

司会者 山本宏（札幌市立藻岩小学校校長）

#### 第2分科会

##### 「小学校高学年における性教育の実践」

①5年生の体育の授業で、テーマは「豊かな人間性を育む性教育～心の発達～」。性に対する正しい認識と望ましい行動の習慣化を図るためには、学校と家庭、地域とが共通理解に立ち連携することが大切であるという認識に立った授業実践の発表であった。

発表者は、小野寺桂一（旭川市立東五条小学校教諭）。

②函館市性教育研究会の小中連携の取り組みで、テーマは、「小・中学校における性教育の進め方～家庭・地域と連携した性教育のあり方をめざして～」。

発表者は、田中直哉（函館市立昭和小学校教諭）。

助言者 前川豊志（北海道教育庁学校教育局主査）

司会者 城崎則幸（札幌市性教育研究会会長）

#### 第3分科会

##### 「中学校における性教育の実践（第2学年）」

①昭和42年から性教育を教育課程に位置付け、性

教育研究委員会を中核として全教員が性教育の指導を行っている柏中学校での、総合的な学習の時間の単元「自分と異性の人間関係を考える」の実践発表である。テーマは、「健全な異性観を育む教育をめざして～自分と異性の人間関係を考える性教育の実践から～」。

発表者は、斉藤圭一（札幌市立柏中学校教諭）。

②函館市性教育研究会の取り組みで、テーマは、「小・中学校における性教育の進め方～家庭・地域と連携した性教育のあり方をめざして～」。

発表者は、池田公貴（函館市立大川中学校教頭）。

助言者 中山明彦（札幌市教育委員会指導主事）

司会者 開発好博（札幌市立北野中学校校長）

#### 第4分科会

「中学校における性教育の実践（第2・3学年）」

①柏中学校の3年生の授業で、単元「自分の生き方を考えよう」。テーマは、「自己肯定感を高め、人間関係力を育む性教育をめざして～自分の生き方を考え『生きる力』を培う性教育の実践から～」。

発表者は、後藤ひろ子（札幌市立柏中学校教諭）

②2年生の授業で、テーマは、「健康教育としての性教育～中学2年生の性教育を考える～」。

発表者は、佐藤栄子（芽室町立芽室中学校養護教諭）。

助言者 猪股 徹（札幌市立白石中学校校長）

司会者 林 英雄（札幌市立真栄中学校校長）

#### 第5分科会

「高等学校における性教育と性意識調査」

①平成20年に札幌市の中心部に開校した午前部・午後部・夜間部の三部制・単位制等のシステムを取り入れた定時制高校の実践。テーマは、「自尊感情を高め、生き方を考える『いのちの学習』」。

発表者は、渡辺千鶴（札幌市立札幌大通高等学校養護教諭）。

②「生と性～命の大切さについて考えさせる」という全体テーマを設定し、外部講師による保健講話を総合的な学習の時間で実践している北海道千歳北陽高等学校の実践紹介である。事例タイトルは「カフェテリア方式を取り入れた性の健康教育」。

発表者は、佐藤恵子（北海道千歳北陽高等学校養護教諭）。

助言者 渡邊裕美子（北海道教育庁学校教育局主査）

司会者 平塚幸男（北海道札幌拓北高等学校校長）



課題別講義A・堀内比佐子講師の講義

### 性教育の課題克服のために

2日目の午後は、5つの課題に分かれ、課題別講義が行われた。

#### 課題別講義A

堀内比佐子全国性教育研究団体連絡協議会常任理事は、「性教育の導入と実践の計画～学校における性教育を進めるにあたって～」というテーマで、ネガティブな印象をもたれやすく、バッシングに遭いやすい学校での性教育を、どのように導入・計画したらよいかを、豊富な経験からわかりやすく講義された。

#### 課題別講義B

「性教育における関係機関との連携～学校における連携の留意事項を中心として～」をテーマに、性教育に欠かせないさまざまな機関・外部講師とのスムーズな連携について、三浦康男全国性教育研究団体連絡協議会副理事長が講義を行った。

#### 課題別講義C

ICT（情報通信技術）は、子どもたちのほうが遙かにリテラシー（活用能力）の習得が早く、大人より進んでいる面がある。その現状、事実を認めることが出発点だというのは、全国webカウンセリング協議会ネットいじめ対応アドバイザーでもある大和剛彦札幌市立札幌大通高等学校教諭。

「情報メディアによる性非行・性犯罪の危険」と題した講義では、さまざまなネットトラブルの仕組み、携帯電話の世界を大きく変えつつあるスマートフォンの仕組み、トラブルや犯罪の元凶となっているSNS(mixiやtwitter、前略プロフィール、リアル、モバゲー、



課題別講義 C・大和剛彦講師の講義

GREEなどのソーシャル・ネットワーク・サービス)の出会い系サイト化。家出サイトやリク写掲示板などの実物を紹介しながら、その危険性を指摘した。

大和教諭は、性犯罪のみならず、ネットトラブル・ネット犯罪から子どもたちを守る一番の近道は、「大人がネット犯罪とネットの仕組みに詳しくなる」ことだという。大人が知らない・守れないことを子どもに「守れ!」というほうが無理なので、子どもに指導する前に、少なくとも子どもたちの知識レベルにまで到達しないことには、助けることは不可能であると強調された。泳ぎ方を知らないのに、おぼれている子どもを救おうとすることと同じだと締めくくった。

#### 課題別講義 D

「保健センターが行う性教育(学校との連携)」をテーマに、西田令子助産師(札幌市手稲区保健福祉部健康・子ども課)が、保健所と学校が連携した性教育のあり方について、事例を交えながら、その事業の内容、申し込み方法などについて講義された。

#### 課題別講義 E

「現在の学校教育では、発達段階に応じて、性行動に伴う危険について理解させ、それを予防する知識や態度、行動を育てることが重要としています。なるほど、もっともです。しかし私たち医師の立場からみると、学校教育では子どもたちの性行為は適切ではないというスタンスのこだわりから、その発達段階の評価が実情に沿っていないのではないかと感じます。たとえば中学校の学習指導要領では、コンドームを使うことの有効性については触れても装着の仕方までは取り扱っていません。またエイズや性感染症の予防の中では性交という言葉は使わずに性的接触という表現を用

いています。しかし、実際にはその適切ではない性行為もすでに経験しているのがわが国の実情です」

と語った鈴木伸和医師(医療法人社団伸孝会ていね泌尿器科)が、「医師が行う性教育(学校との連携)」をテーマに講義をされた。

### 直面する課題をめぐって

本大会の最後のイベントとして、午後3時10分から、2つの実践発表が行われた。

1つは、子宮頸がんをめぐる課題についての実践発表である。

「ハイリスク HPV の性行為感染知見により提起された学校性教育の課題」をテーマに発表する予定であった武田敏千葉大学名誉教授は、体調をくずされ残念ながら欠席し、発表できなかった。武田教授は、20代の女性に急増する子宮頸がんの予防に早くから取り組んでこられた医学者の一人でもあり、HPVの感染予防教育とワクチンの普及を呼びかけてきた。

武田教授の発表予定であった内容も含め、「高校保健『生活習慣病』のなかでの HPV の感染予防教育～がんにならない・早期発見するために自らが行うべきこと～」をテーマに、赤澤宏治千葉県立船橋東高等学校教諭(千葉県性教育研究会)が、実践発表を行った。

2つ目の発表は、国際意識調査「Starting Families」の調査結果についての報告。この調査は日本を含む世界18か国で妊娠を望んでいる10,045人の人々から得た回答をもとに、子どもをもつことや不妊治療を求めるとい意思決定に影響を及ぼす要因を明らかにし、妊娠および不妊についての知識レベルを調査したものである。

この調査の結果を「日本の妊娠・不妊に関する知識レベルについて～国際意識調査 Starting Families 結果より～」と題して、杉本美麗メルクセローノ株式会社不妊・内分泌領域事業部 PR コーディネーターが、日本人の知識レベルについて報告された。

次回、第42回全性連全国性教育研究大会は、島根県松江市「くにびきメッセ」(島根県産業交流会館)で、「さらに広げよう!性教育の視野を」(仮)をテーマに、平成24年8月2日(木)～3日(金)の2日間開催する。同じ会場では、2日(木)～5日(日)まで、第12回「アジア・オセアニア性科学学会」も同時開催される。

## 社会としての取り組み

バージニア州リッチモンドの幹線道路沿いにこんな文を表示した大きなビルボードが掲示されています。「Someone You Know Is Gay... Maybe Someone You Love」——あなたの知っているだけかはゲイです。それは、大好きなあの人もかもしれません。

アメリカには大都市ごとに性的少数者のための公民館のような施設が設立されていて、これも周辺まで含めて人口120万人の大都市圏を形成するリッチモンドのゲイ・コミュニティセンターがスポンサーです。じつはこれとまったく同じビルボードが24年前の1987年にも出されていて、今回はその復刻版。今も昔も、性的少数者への偏見を解消する社会としての努力が根気よく続けられています。

偏見とは、実態とは違う情報の蔓延のことです。どうして蔓延するのかというと、実態に近い情報が相対的に少ないとき、元情報が伝言ゲームのようにズレてゆき、そのズレが誇張されたりむしろその誇張がさらに面白おかしく拡散されるからです。そうしていつのまにか実態などどうでもよくなってしまふ。

カムアウトの難しさはそこにあります。「私はレズビアンです」とカムアウトしたとき、自分が伝えたい「レズビアン」の実態と、それを聞いた人たちの知っている「レズビアン」のイメージとに微妙な、あるいは確実な齟齬があるからです。ここでは言葉によるコミュニケーションが成立していない。同じ「レズビアン」という言葉で、お互いに違うことをイメージしているのだから。「え、レズなの?」「いや、そういう意味ではなくて」「じゃあ何なの?」「だからレズビアンなんだけど違うの、そういうんじゃないくて」ってな具合に、なんだかわけがわからなくなるのです。

つまりカムアウトの難しさは「ぼくはゲイだが、きみが思っているゲイとは違う」ということを言いたいのに、実際は「きみの言ったことなんて関係ない。相

手がどう聞いたかこそが問題になるのだ」という現実に直面することなのです。この現実を組み伏せるには技術が要ります。しかしそんな齟齬に対処する技術も免疫も持たない若い子たちはどんどん疲弊して、自殺傾向さえ持ち始めます。

昨年夏から秋にかけて米国ではLGBTの若者たちの自殺が連続し社会問題になりました。テキサスでは中学でゲイだからかわれていた13歳のアッシャー・ブラウンが銃で頭を撃って自殺し、ニュージャージーではラトガーズ大学1年の18歳のタイラー・クレメンティがジョージ・ワシントン橋から投身しました。ロードアイランドでは19歳の大学生レイモンド・チェイスが首を吊り、ペンシルベニアでも14歳のブランドン・ビットナーが自殺しました。これらを機にニュースメディアはLGBTの若者たちへのいじめと自殺問題を大きく取り上げました。若い子たちの自殺を思いとどまらせようと、YouTubeを活用した「It Gets Better」というプロジェクトも始まりました。

このプロジェクトは悩める若者たちに向け「きみたちを取り巻く状況はいまは大変かもしれないけれど、それは必ずよくなるよ (It Gets Better) !」というメッセージを伝えるもの。だれもがビデオで自分なりのメッセージをYouTube経由で投稿でき、いまではオバマ大統領やヒラリー国務長官ら政治家や官僚、人気テレビ番組のキャストや歌手や大リーグの野球選手たちなども含め、有名無名の25万人もが参加して4000万回以上視聴される世界的な運動となっています。

翻って日本。日々報道される子どもたちのいじめ自殺の中に、はたしてどれだけのLGBTの子たちが交じているのか。私たちにはとっかかりとなるそんな情報すらありません。個人情報保護と言いますが、個人の命がかかる問題でそれは通用しない。

個人では解決できない問題があります。LGBTへの偏見の解消は、偏見が社会的であるが故に、社会として取り組まねばどうにもならない問題なのです。(了)

きたまるゆうじ ニューヨーク在住(18年)ジャーナリスト/作家/  
元・中日新聞(東京新聞)ニューヨーク支局長。

# 「ありのままのわたしを生きる」ために



## 第6回

### 自由な空間の中で

#### 土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のMtFトランスジェンダー。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

ここ数年、たまに「お座敷」の声がかかるようになりました。「いつきさんの話を聞きたい」と言ってもらえるのはありがたいことです。でも、普段は仕事があるのでなかなか行けません。いきおい、「お座敷」は夏休みに集中します。この夏も、何度か話をしに行かせていただきました。

ところで、話をしている時、笑顔で聞いて下さるとホッとします。逆に、無表情で聞かれると、すごく話しづらいものです。「話しにくいなあ」と思った時は、笑顔の人を見つけて元気をもらって話を続けます。そんな笑顔の人は、往々にして「女性」であるのは不思議なものだなあと思います。

#### 閑話休題。

中学生の頃のわたしの高校のイメージは、ひとことで言うと「バンカラ」でした。というのは、中学校時代に好んで読んだのが北杜夫の作品であり、なかでも『どくとるマンボウ青春記』は愛読書だったからです。そんなわたしは、希望通りの高校に入って、いきなりイメージと現実の違いにとまどいました。ゲタをはいている人もいなければ、「鬱勃たるパトス！」などと叫んでいる人もおらず、妙にこぎれいな高校生活に、少々失望しました。ところが、高校生活が進むうちに、徐々に自分の学校の魅力に気づきはじめました。

京都市の北部、街中から少しはずれたところにあるその学校は、その立地条件からか広大なキャンパスを持っていました。通常ならキャンパスの端に校舎があるはずなのに、その学校はキャンパスの真ん中に校舎があり、校舎をはさんで南側と北側にふたつグラウンドがありました。キャンパスには塀も校門もありません。いつでもどこからでも出入り自由でした。しかも、キャンパスの真ん中には生活道路が一本通っていました。近くの人たちがその道を通って犬の散歩をしている風景はあたりまえのものでした。

また、その学校には制服はありませんでした。いちおう「左胸に校章をつけること」という決まりがあった気もしますが、そんなものを守る生徒は誰もいませ

んでした。それどころか、校則らしい校則もなかった気がします。もっともある時、あまりにもステスकेの服を着てきた女子生徒に「ちょっとそれはあんまりやろう」と言っている教員の姿を見たことがあるので、それなりの節度は要求していたのかもしれませんが。

昼ご飯は「学生食堂」で食べることができました。とても安くて、そのかわり味もそれなりのものでした。でも、パンと牛乳だけの購買部しかなかった中学校とのあまりの違いに驚きました。また、キャンパスの前に3軒ほど定食屋があり、そこに食べに行くちょっとリッチな生徒もいました。

授業については、さすがに公立とは違い、かなり高度でした。特に英語の教科書は公立のもの以上の厚さがあり、ずいぶんと苦勞しました。ただ、ほとんどの生徒が「学内推薦」で大学に進学するため、受験勉強のプレッシャーとは無縁でした。みんな自分が必要とする分だけの勉強をしていました。

先生が授業を休むと「休講」でした。別にどこに行ってもかまいません。近くに大きな池がありボート屋さんが営業をしていたので、そんなところでデートをしていた生徒もいたようです。また、冬になると雪が積もります。すると、交通機関が大幅に遅れるために、始業時間が遅くなります。わたしは近くに住んでいたの自転車で通学をしていましたが、そんな雪の日はのんびりと雪の中を歩いていき、池のまわりにいる鴨を追いかけながら学校に行きました。学校に着くと、なぜかみんなが雪合戦をしていたことを覚えています。

先生たちは、いつもわたしたちと対等につきあってくれていました。冗談を言って笑っている時はもちろん、議論をしている時も、いつも真剣でした。おそらく先生たちは、わたしたち生徒を「大人」として扱ってくれていたんだろうと思います。

わたしにとっての高校生活をひとことで言うなら、「自由」でした。そしてその自由な空間の中で、さまざまな出会いに恵まれました。その出会いは、まぎれもなく今のわたしに影響を与えています。

# BOOK GUIDE

## 今月のブックガイド

### 「セックス嫌い」をめぐって

『セックス嫌いな若者たち』は、「第5回男女の生活と意識に関する調査」(厚労省研究班、2011)で浮かび上がってきた、若い男性のセックス離れを主題にしている。

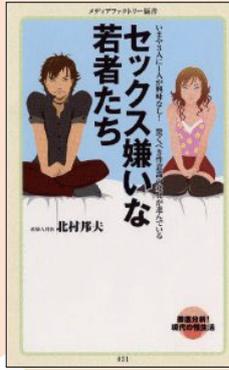
この調査の責任者でもある著者は、産婦人科医、日本家族計画協会クリニック所長で、性の悩みに関するカウンセリングや診療に携わっている。本書では、調査結果の論考とともに、取材した若者たちとの対話も織り交ぜている。

本書で「若者たち」というとき、ヘテロセクシュアルの若い男性を指す。「セックスは基本的に、男性と女性の共同作業」とセクシュアリティの多様性は排除され、「これまでのセックスは『男性主導』という形で行われるのが普通」と、セックスの主体は男性を想定している。

まず、調査結果の「あまり関心がない」「まったく関心がない」「嫌悪している」という回答をまとめて、“セックス嫌い”と総称するのは、かなり無理があると思う。

“セックス嫌い”の若者の事例は——アニメおたく、自慰で自己充足、自慰で陰内射精障害、女性の一言で傷つき勃起不全、アダルトサイトの性描写に不潔感を持った、経済的余裕がない、仕事で過労、セックスより楽しいことがある、純愛志向など様々。治療や知識が必要と思われるケースもある。性交痛や陰内射精障害が、適切な対応法を知ることで改善したり、アダルトサイトをうのみにする人がリテラシーを習得すれば、大いに助けになるに違いない。だが、なかには、単に著者と価値観が異なり、彼らにセックスを奨励するのは、余計なお世話と受けとめられかねないだろうと危惧する。

著者は10代後半、ほとんどセックスのことしか頭になく、暗い青春時代を送った若者の1人だったという。マスターベーションに耽り、一晩に7回挑戦して、前立腺



### セックス嫌いな若者たち

北村邦夫著  
メディアファクトリー新書  
777円(税込み)

収縮で肛門の激痛に苦しんだことも。学生結婚し、男3人女2人の父親となっている。「私たちオヤジ世代からすれば、この年代の男性(16~24歳)にとって、セックスより楽しいことなんてあるわけがないと思ってしまうのです……」。自らの性意識を育んだ経験の開示には、誠意が伝わってくる。

「このまま若者たちのセックス離れが加速していけば、わが国の少子高齢化も想定以上の速さで進んでいくということ。年金や介護の問題が深刻化するだけでなく、若年層の人口が減少すれば、日本経済はいま以上に活力を失っていくでしょう」と、著者は危機感を募らせる。「(セックスに消極的な人たちが)一斉にセックスに励むようになれば、少子化など、一気に解決するはず」という。だが、性的自由や子を望むのか、妊よう性、まして妊娠、出産、子育ては長期的なスパンで取り組むことで、それほど、単純な話ではないのではないかと。

セックス奨励の理由は、さすがに時代錯誤の「産めよ、殖やせよ」ではなく、著者いわく、自慰を上回る快感をもたらすことや、異性との究極のコミュニケーションであること。セックス嫌い克服の処方箋は、性の健康教育である。「セックス嫌いの若者が1人でも多く『転向』してくれることを祈らずにはいません」という。(異性との)セックスに追い立てるような言説は、(異性との)セックスに関心がなかったり、嫌いな人に、罪悪感を増幅させかねないのではないかと。

日本に広く流布し、北村氏も信じる、いわゆる“少子化亡国論”に異議を唱える赤川学著『子どもが減って何が悪いのか!』(ちくま新書)の併読をお勧めしたい。少子化を止めることは困難で、それを前提とした公平で自由な(性的自由も保証した)社会を目指すことを提唱。「産んでもよいし、産まなくてもよい。産んでも産まなくても、懲罰を受けることもないし、報奨されることもない」という支援のあり方を探っている。

(フリーライター まつばらけい)

▶▶ 10月10日(月) 10:00~15:00 ◀◀

## HIV / エイズに見る日本・アジア ～越境するセクシュアリティ～

**内容** セッション 「HIV / エイズとアジア情勢：当事者の視点から」 羽鳥潤 (日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス)、「HIV 陽性者と向き合う：医療・支援の現場から」 沢田貴志 (特定非営利活動法人・シェア=国際保健協力市民の会)、「日本・アジアにおける MSM の現状」 市川誠一 (名古屋市立大学)、ほか。

**会場** 国際基督教大学 ダイアログハウス  
国際会議室 / 中会議室  
(JR 武蔵境駅南口・JR 三鷹駅南口からバス国際基督教大学下車、京王線調布駅北口からバス富士重工前下車)

### 参加費・問い合わせ

参加費 / 無料。同時通訳あり。  
問合せ先 / 国際基督教大学ジェンダー研究センター (CGS)  
TEL & FAX 0422-33-3448 (月～金 11:00～17:00)  
URL <http://subsite.icu.ac.jp/cgs/>

11 / 12 (土)

10:00~17:45

}

11 / 13 (日)

10:00~16:15

## クィア学会第4回研究大会

**内容** 1日目：シンポジウム「3.11 以後のクィア」シンポジスト：高橋準 (福島大学)、堤愛子 (町田ヒューマンネットワーク)、新田啓子 (立教大学)、真木柁鷹 (性と人権ネットワーク ESTO)、司会：菊地夏野 (名古屋市立大学)、映画上映、ほか。  
2日目：個人研究報告、ほか。

**会場** 中央大学 多摩キャンパス  
(東京都八王子市東中野 742-1)

### 【問い合わせ先等】

参加費 / 一般 2,000 円、会員 1,000 円、学生 1,000 円。  
問合せ先 / クィア学会事務局  
〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑 1  
名古屋市立大学人文社会学部 菊地夏野研究室気付  
TEL & FAX 052-872-5171 E-mail [jaqs.info@gmail.com](mailto:jaqs.info@gmail.com)  
URL <http://www.queerjp.org>

10 / 1 (土)

13:00~17:30

## 日本性科学連合 (JFS) 第 13 回性科学セミナー

### 【テーマ】

「災害とジェンダー、セクシュアリティ」

**内容** 特別講演「震災復興にジェンダー・多様性の視点を」 丹羽雅代 (東日本大震災女性支援ネットワーク)、講演「震災における生と性を守る意味とは」 渡會睦子 (東京医療保健大学)、「『大震災』地震・津波・原発事故とセクシュアルヘルス」 村口喜代 (村口きよ女性クリニック)、「災害とジェンダー」 小川真里子 (東京歯科大学市川総合病院)、「災害とリプロダクティブヘルスへの国際支援」 小長井春雄 (社団法人日本家族計画協会)、「平時からできるワクチンによる性感染症予防」 内藤俊夫 (順天堂大学)

**会場** 東京慈恵会医科大学西新橋校 大学 1 号館 3 階講堂  
(JR 新橋駅烏森口徒歩 15 分・都営地下鉄三田線御成門駅徒歩 5 分)

**【問い合わせ先等】** 参加費 / 一般 3,000 円、学生 1,000 円。  
問合せ先 / 日本性科学連合 (JFS) 事務局  
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-25-11  
九段中央ビル 602 号室 (株) パピルス内  
TEL 080-1242-5025 FAX 03-5215-7004  
E-mail [info@jfs1996.jp](mailto:info@jfs1996.jp) URL <http://www.jfs1996.jp>

## ティーンズカフェ

～女の子のための、からだと心の相談室～

気になること、心配なこと…  
だれにも言えないで悩んでいることがあったら  
ひとりで悩まないで  
ティーンズカフェに来て相談してみませんか？  
相談は無料  
ティーンズカフェは、あなたの味方です。

### 場所

主婦会館プラザエフ 4F カウンセリング室  
(東京都千代田区六番町 15 番地)

### 主催

財団法人 主婦会館

### 相談日

毎週木曜日 9:00～19:30 (完全予約制)

### 予約

電話予約 03-3265-8119 (電話での相談はしていません)  
受付時間 平日 10:00～17:00  
E-mail 予約 [info@plaza-f.or.jp](mailto:info@plaza-f.or.jp)